近代化と地域度
――茨城県龍ヶ崎市の産育儀礼をめぐって――

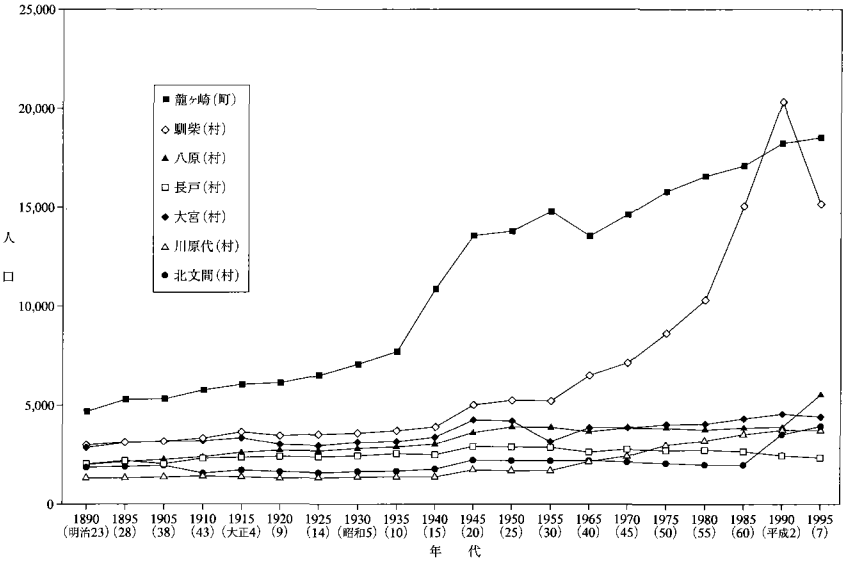
日本民俗学会会員
佐々木　美　智　子

はじめに

いつの時代も生活の基盤となる「現在」は、過去からの伝統と未来への変革との間にあって、その時々の意味付けを模索する場となっている。民俗慣行としての産育儀礼もその時代や社会に応じて新たな意味を見出しつつ継承される。消滅もそうした過程でのひとつの選択肢だが、いずれにしても変化・変容のない継承はありえない。農業や漁業など第一次産業を生業の基盤とする伝統的な社会の減少に伴い、第三次産業を主たる生業とする町場の生活に適応するための都市化現象が拡大し、広い地域でそれまでの社会構造の崩壊が生じている。こうした伝統的な社会から近代社会への移行において、産育儀礼も変化・変容あるいは消滅といったかたちで継承される。本稿では、伝統的な地域共同体に対する依存の度合いを「地域度」と概念化し、茨城県龍ヶ崎市における産育儀礼の継承をめぐる問題を考えることを目的とした。

龍ヶ崎市については、一九八三（昭和五十八）年に開始された民俗調査によって『龍ヶ崎市史民俗調査報告書』が上梓されている。この時期は龍ヶ崎市が取手市などに続いて急速に人口が増加した時期と重なる。当時の話者は、明

〔表1〕 龍ヶ崎市域の人口推移グラフ（『龍ヶ崎史近現代史料編』より抜粋）



治後半から大正期に生まれた方が中心であり、これまでの民俗報告書がそうであったように、伝統的な地域共同体における民俗文化を龍ヶ崎市において調査し、記録に残しておこうとするものであった。

今回の調査は、それからほぼ二〇年を経過している。この調査では、人口の急増した地域とほとんど変化しない地域をフィールドとし、かつ年齢層の異なる人々にお産をめぐる儀礼を調査することによって、お産を取り巻く環境やお産に対する人々の意識にどのような変化があったのかを探ることを目的とした。

具体的には、人口の急増した地域（馴柴地区馴馬町平台）と人口の変化の少ない地域（大宮地区大徳町上佐沼）の二地域〔表1参照〕をフィールドとし、前述の報告書の話者から三世代にわたって聞き取り調査を行った。

龍ヶ崎市は県南に位置し、一九五四（昭和二十九）年に旧龍ヶ崎町と旧馴柴村、八原村、長門村、大宮村、川原代村、北文間村の合併によって誕生した。農業の傍ら商業や工業に従事する者の比較的多かった旧龍ヶ崎町を除けば、大方が農業地域であった。しかし、農業人口の

変化をみると、一九六〇（昭和三十五）年に龍ヶ崎市の人口の約三分の二を占めていた二万人弱が、三〇年後の一九九〇年には二、〇〇〇人を割り、その後も減りつづける。一九九六（平成八）年の農家規模からみれば、総体として第二種兼業農家が多く、専業と第一種兼業農家は少ない。

こうした中で大宮地区の大徳町上佐沼は第二種兼業農家が多いが、転入転出も少なく、昔ながらの付き合いを重視している地域である。それに対し、馴柴地区馴馬町平台では戦後の疎開を契機とする人々の定住、その後のニュータウン建設や常磐線の輸送力アップによって人口が急増している。

一、近代化以前の龍ヶ崎市

まず、伝統的な地域共同体の集合であった龍ヶ崎市について、『龍ヶ崎市史民俗調査報告書』をもとにみていくことにする。龍ヶ崎市は利根川水系に含有され、水とのたたかいの歴史と共に水運によってもたらされたと思われる民俗文化の存在が報告されている。

昔は利根川筋の船頭が行っていたという「つく舞」は、地域の氏神である八坂神社の祇園に行われる。道路に高さ約十七メートルの柱を立て、笛や太鼓の囃子に合わせて、立附袴に蛙の面をかぶった舞人がのぼり柱の頂上で竹弓を引き東西南北に向かって矢を放ち悪魔を払い、続いて逆立ちや綱を伝わって下りながら妙技を繰り広げる。この祇園には各町内からも神輿が繰り出し、各家では赤飯を蒸かしたり、小麦饅頭を作ったり、うどんを打ったりした。嫁に出た娘や親戚も集まってくるという。

茨城県南部から千葉県北部の利根川下流域にかけて盛んに行われていた、オビシャ、オピシャ、オブシャなどと呼ばれる歩射行事も、龍ヶ崎市においても盛んに行われていた。

また、各家ではウジガミと称する屋敷神を祀っている。以前は毎年新しい藁で小屋を建て替えていたが、現在ではコンクリートや石製が多く、陶器製のものもある。祭日も、供え物も混ぜ飯や赤飯、餅などさまざまである。

龍ヶ崎市は北部稲敷台地とその南に広がる沖積平野に位置する稲作地帯であり、江戸時代以降昭和三十年代まで続けられた土地改良や水利組合活動の結果現在のように整備された水田地帯となっている。日常の食事では、七対三くらいの比率で麦より米の使用率が高かったが、婚礼や七つの祝いのヒモトキなどには一般的にはうどんが使われた。八原地区では祝事には必ずヒモカワウドンで、うどんを作るのは一人前の主婦として当然のこととして仕込まれ、正月の雑煮の代わりにヒモカワを食べる家も多いという。

旧龍ヶ崎町及び若柴、別所などを除く龍ヶ崎市域では、各町内が字に分かれ、さらに「坪」という単位になり、坪の中には数戸で構成される「組合」（組合は坪内で完結するものと、他の坪へまたがって構成するものとある）がある。坪の構成員は葬式などの手伝いに行き組合はその中心となって働く。子どもが生まれたときのオビアケには坪内の家と組合の家を招くなど、近隣の付き合いを大切にしている。坪内にはオピシャの費用を賄うための免田や冠婚葬祭に使う膳椀などの共有財産があり、祭礼の日には家族の大半が「鍋かけず」といって、自分の家で食事の用意をしないですむくらい、ヤドに集まって飲み食いしたという。坪が社会生活のひとつの単位として大きく機能していた。

市内には、こうした坪を中心に女性だけの講中が数多く存在し、それぞれ子安様、道禄神講などと信仰の対象によって名称は様々であるが、ヤドを決めて安産祈願や犬供養を中心に行うのが一般的であった。坪内の付き合いは産育儀礼においても例外ではなく、七歳になると盛大に行われるヒモトキとかオビトキとかいわれる行事には、その準備から後片付けに至るまで坪内のメンバーで手伝うことが当たり前とされていた。

こうしてみてくると、近代化以前の龍ヶ崎市における社会構造の基盤は、地域における氏神、イエにおける家の神、近隣における坪や組合であったといえる。そして、人口の変わらない近隣の付き合いがそのまま続いている大徳町上

佐沼では現在でも坪や組合が大きな機能を果たしている。換言すれば伝統的な地域共同体がそのまま拘束力を持ち、そのまま機能している。これに対して人口の急増した馴柴地区馴馬町中台では元からの住人とニュータウン建設などで移住してきた人の居住地が異なり、構成メンバーの変更がないにもかかわらず坪といったものは、講など特定の行事に限って機能しているに過ぎないといえる。

伝統的な地域共同体に対する依存の度合いというものを「地域度」と概念化すれば、前者は地域度の高い地区、後者は前者に比して地域度の低い地区と差別化できる。地域度が高いということは伝統的な地域共同体の拘束力の度合いが強いということでもあるから、そうした地区ではこれまでのしきたりにしたがって前年までのものをそのまま踏襲しようという意識が強いのに対して、地域度の低いところでは現実の状況に合わせて対処しようという意識が働いていた。これからみていく出産の場を中心とする出産環境については地域度の高低が影響することはないが、出産をめぐる儀礼についてはそのあり様が異なってくるのである。

二、出産環境の推移

ここで話者についての類型化を試みたい。民主主義思想の普及を「近代化」の一つの指標とするとき、第二次世界大戦を近代化以前と以降の境界線と見なすことができるように思う。そうした意味で『龍ヶ崎市史民俗調査報告書』は近代化以前の姿を記録に残そうとしたものであり、そこに登場する話者の多くは明治後半から大正期に生まれた方であった。女性の場合は昭和二〇年代までに出産を経験している。いまこの世代を近代化以前に生まれた第一世代としておきたい。

今回の調査での聞き取りの対象者は第一世代の「嫁世代」と「そのまた嫁世代」にあたる。すなわち「嫁世代」は

大正末から昭和に生まれ、昭和に出産を体験した近代化への歩みの体現者ともいうべき第二世代。「そのまた嫁世代」は昭和二十年代以降に生まれ、昭和後半あるいは平成に出産を経験した近代市民社会の住人たる第三世代ということになる。こうした三世代の聞き取り調査をもとに「地域度」という観点から出産環境や産育儀礼の変遷を考察していくことにする。

《馴馬町平台の場合》

『龍ヶ崎市史民俗調査報告書』Ⅰの報告では、馴柴地区において資格をもたないトリアゲバーサンやコトリバーサンの活躍が記録されている。大正の頃まで座産が普通で、掛布団などをかさね、それにつかまる形で突っ伏して産む。後ろでトリアゲバーサンや姑が腰を支えていたという。

今回の調査では、人口の急増した馴柴地区の馴馬町平台在住のSさんとNさんにご協力いただいた。一九二五（大正十四）年生まれのSさんは馴馬の出身、一九二四（大正十三）年生まれのNさんは龍ヶ崎市貝原塚の出身である。どちらも後で報告する大徳町上佐沼のTさんとMさんより少し年長だが、出産は同じころである。前述の第二世代にあたる。

Sさんは、馴馬の出身で実家のすぐそばの平台に嫁にきた。Sさんたちが子どものころは、男親は年中兵隊に行っていたので、残された女親とおばあちゃん、それに日雇いで人を頼み、田んぼや畠を作っていた。Sさんは、学校から帰るとすぐに子守りをした。上の姉は、下の子を連れて学校へ行った時代であった。おやつは、学校から帰ると大きな握り飯を自分たちで作って食べた。女親が朝ご飯をたくさん炊いたからと安心していても六人もきょうだいがいると夕方には空っぽになっていた。日暮れになるとSさんは台所の受け持ち。きょうだいに手伝ってもらいながら風呂の水を車井戸で汲み、風呂を炊くのもSさんの仕事だった。

馴馬では畠は台地にあるが、田んぼは下のほうにあった。「台風がくるよ」というと大急ぎで、稲を上げるのが大

変だった。Sさんの家の田んぼは家のすぐ下だったので、荷車を使うより背負って運んだ方が早かった。Sさんたちは稲を三把ずつくらい背負ってあがったが、男親は天秤で担いで運んでいた。

Sさんの十二歳違う一番下の妹（昭和十二生）が生まれたときは、おばあちゃんが取り上げた。昔は、たいてい自分の家で産んだ。一人でなす（産む）人もいた。

サンジャ（産者）の食べ物というと、味噌漬けに麩の煮たのに鰹節だった。麩や鰹節はサンミマイにもらう。たいていは味噌漬けにオコウコウで食べさせられたので、夜目くらになることもあった。また、辛いものはだめで、イカやタコなどイボイボのあるものを食べることを嫌った。

腹帯は親が用意してくれたのを最初は戌の日に締めた。龍ヶ崎の観音様でいただいた腹帯が、赤なら女、白なら男が産まれるという。安産祈願には、伊奈のお不動様に行き、お米を少し借りてきて、産後に一升返した。親は筑波下の泉の観音様や雨引の観音様にもお参りに行ってくれた。

昭和二十二年、二十六年に出産したが、隣に疎開してきた産婆（助産婦）の石井さんに来てもらった。生まれる前にも時々みてもらった。実家がすぐ近くだったので陣痛が始まってから実家へ行き、布団に油紙を敷いてお産した。後産は、イナツボ（胞衣ツボ）に入れて、自分の家のお墓に埋める。産湯は、産婆が入れてくれた。人に踏まれるといけないから、生きている木のもとに捨てるようにいわれた。

Nさんは、四人の子どものうち長男だけを実家で産んだ。産まれそうになってから呼びに行くと田町の産婆さんが自転車で来てくれた。産後も七日ぐらい来てくれていた。二人目からは、馴馬に疎開してきていた産婆の石井さんの世話になった。三番目のときは五月で、植付けをやっているときに破水した。もどっても陣痛が来ないので縫い物をやっていていたら駆けつけた石井さんにびっくりされた。

東京の千住から疎開してきた石井さんという産婆さんには、みんな世話になっていた。割烹着かけて黒いかばん下

げてきてれた。お産のお礼はお金を包んだが、世話になった人は農業をやっていない石井さんに普段から野菜を届けたりしていた。オビアケに産婆さんを呼ぶ家もあった。産婆さんが亡くなった時にはみんな線香をあげに行った。上手で有名だった砂町の杉山産婆も含め、産婆さんのことはみんなトリアゲバーサンと呼んでいたという。

《大徳町上佐沼の場合》

『龍ヶ崎市史民俗調査報告書』Ⅱで報告されている龍ヶ崎市大宮地区の産育習俗は一九八四（昭和五十九）年に調査されたもので、今回の調査では当時の話者の嫁世代すなわち第二世代にあたるTさんとMさんの二人、そのまた嫁世代すなわち第三世代にあたる①から⑤の五人の協力を得ることができた。『龍ヶ崎市史民俗調査報告書』Ⅱの報告も含めた三世代にわたるお産の場がどのように変化したかをみていくことにする。

龍ヶ崎市大徳町上佐沼のTさんは、一九二七（昭和二）年生れで、マレコ（跡取り娘）であるが、妊娠したことは、最初に夫に話した。一九五〇（昭和二十五）年に長男を出産、一九五三年に長女を出産。長男のお産は、親が宮渕町の中村先生という男性医師を頼んでいる。自転車で呼びに行くと昔は人力車できてくれるおしゃれな先生であったが、陣痛が痛くて泣き喚いていると「おっかなかった」という。外科、内科、お産何でもやる先生で、死産も取り上げていた。当時は、宮渕町の中村先生の他には砂町に椎名先生と二人の産婆さん（助産婦）が開業。お産というと産婆さんに頼む人が多い時代、最初の子だからと親が医者を頼んでくれたのだという。

二人目のお産のときには砂町の秋山助産婦を頼んだ。「産婆さんはずうっと付き添ってくれたので安心で、（赤子に）お湯をつかわせてくれるのもよかった」という。Tさんは一一人きょうだいの総領だが、Tさんの妹たちは自宅ではなく石川病院で産んでいるので、施設分娩へ移行する直前の自宅出産だったことになる。

Tさんは二人の子をどちらも自分たちの寝室である納戸で、布団の上に薬局で買ってきた油紙を敷き、毛布や半纏などを重ねてそこでお産をしたという。昔の人は箪笥の取っ手につかまって産んだ、障子の桟が見えなくなるほどに

ならないと生まれないと聞いていたのに、仰向けでもすぐに生まれた。産むまで働いていたのがよかったとふりかえる。

お産の前に、産婆さんや医者にかかることはなく、母子手帳もなかった。「生理が止まって一回くらいは産婆さんに行ったかな?」という程度。隣の誰それがお産をしたとか、お産がどうだったとかと日常的に話を聞いたりする程度だが、親が一一人も産んだので（一番下とは二十四歳も違い、死産もあったが）親のお産を見ていてお産とはどんなふうかを知っていたという。

Tさんの親の親つまり祖母にあたる人が取り上げていた。Tさんの母は貰い子で、祖母は子どもを産んだことはなかったが、近所の人にも頼まれて何人もの子を取り上げたという。隣の人が馬車でお産に帰ってきたときにも、祖母がお風呂にいれてあげていたのを覚えている。

また、今は機械で農作業をするようになって楽になったが、Tさんが出産した頃は手作業で産むまで働いていたので、安産だったとふりかえっているが、千葉へ嫁に行った一九五三年生れの長女がお産するときには、運動のために散歩をしたとか、つわりがひどくて入院したとかで、大変だったという。

同じ龍ヶ崎市大徳町上佐沼のMさんは昭和三年生れで、近くの河内町の出身。長男を一九五二（昭和二十八）年、次男を一九五四年に出産。ほとんどの人が実家で産んでいたので、自分も予定日の半月ぐらい前になって実家へ行こうと荷物を作ったらその晩に生れてしまったという。畠をやって、籾運んで、かますを四、五〇枚こすったらお腹が急に痛くなり、砂町の椎名先生（現在は牛久で開業）を呼んだということで、Mさんの場合も初めの子は医者にかかるよう姑に勧められたという。しかし、「男の（産婦人科の）先生は産ませるだけだった」と、産後は同じ砂町の藤ヶ崎助産婦を頼んでいる。二人目はお産のときから助産婦を呼びたかったが、盲腸になり結果的に病院の先生に家に来てもらうことになった。

〔表２〕　大徳町上佐沼の聞き取り調査より作成

	生年	出身地	出産年	出産場所　※選んだ理由
①	S23	同所	S46・49	藤ヶ崎助産院 ※親も藤ヶ崎助産院で出産したので
②	S26	利根町	S49・53	堤産婦人科（取手市） ※勤務先が取手市だったので
③	S35	龍ヶ崎市貝原塚	S58・60 S61	野村医院（龍ヶ崎市）　※近くなので いがらしクリニック（同）※最も近くなので
④	S32	龍ヶ崎市若柴	S57・59・H2 H5	野村医院（龍ヶ崎市）　※近くなので 愛和病院（牛久市）　※帝王切開だったので
⑤	S42	取手市	H4・8・10	椎名産婦人科（牛久市）　※評判がいいので

次に、第三世代五人の出産年と出産場所をみると、〔表2〕のようになる。全員が、施設分娩である。①は親子ともに藤ヶ崎助産院で出産しているが、先のMさんも自宅に椎名医師を呼んでお産しているものの、産後は世話になったという藤ヶ崎助産婦の施設である。また、Mさんが砂町から呼んだという椎名医師は後に牛久で開業、現在は二代目があとを継いでいるが、⑤はその椎名産婦人科で出産している。

『龍ヶ崎市史民俗調査報告書』Ⅱの報告によると、大宮地区には大正の終わり頃には産婆さんがいた。なるべく産婆にかかるように巡査が呼びかけたが、実際には戦前まで、トリアゲさんと呼ばれる近所のおばあさんが取り上げることが普通に行われ、母親、姑などのやっかいになったという。Tさんの祖母もそのようなトリアゲさんであったと思われる。また、お産はふとんやコタツをつかんで、座って産むことが大正のころまでは普通で、産婦は突っ伏した姿勢でトリアゲさんがころあいを見てとりあげたという。しかし、Tさんがお産をする一九五〇（昭和二十五）年、一九五三年ころには出産の場が自宅であっても仰臥位のお産となり、親が医師にかかるよう勧めている。そして、Tさんの妹たちは近くにできた石川病院での病院出産となり、上佐沼においても自宅で産む人がほとんどいなくなる。

人口の急増した地区と人口変化の少ない地区を比較しつつ、三世代にわたって出産環境という視点からその推移をたどってきた。そこにはお産の

介助者がトリアゲバーサン→産婆（助産婦）→産科医という無資格者から資格所持者へと移り変わり、出産の場も自宅から施設へという変遷が見られた。近代化とともに、お産事情は医療施設において有資格者の介助によるという医療管理のもとに取り込まれたのである。しかも、それは地域度の高い地区と地域度の低い地区の区別なく、地域度の影響を受けることなく進行したということになる。

三、産育儀礼の変化・変容

これまで見てきたように、出産環境の推移ということに関して地域度の高い地区と低い地区による差異はなかった。しかし、儀礼の継承に際しては、地域度が大きな要因となることが予想される。地域度が高ければ、個人の意思の入る余地は少ない。一方、地域度が低いということは、伝統的な地域共同体の拘束力が弱いことを意味するので、個人の意思が反映され、場合によっては儀礼の消滅という事態を招くことになるからである。

人口の急増した馴馬町平台は坪や組合といった地域共同体の機能が構成員の出入りや変更がないまま限定化・形骸化していることは前に述べた。それに対して人口の変化のない大徳町上佐沼は現在でも以前の機能を保持している。お産をめぐる儀礼を通して二地区の相違をみていきたい。

《馴馬町平台の場合》

オビヤのうち（産後二〇日）は、からだが穢れているので人の前に顔を見せないようにする。サンジャのところには、男の人は近づかない。サンミマイやオビアケにも女年寄がいれば女年寄というように、男所帯の場合を除いてはサンジャの付き合いは女がした。

出産後はミツメノボタモチを親元、嫁の実家、仲人、組合に配る。おジュウバチ（重箱）の下に餅米で炊いたご飯

を入れ、その上にあんこをのせる。いただいた方では、おハチの隅に少し残し、マッチ一つか石鹸一個を入れてお返しする。孫が生まれたときには、ミツメを炊いて、病院と実家と仲人のところに届けた。

サンミマイには、カタオビヤマエといって産後一〇日ぐらいに、親や親戚、組合の人が餅米一升をジュウバチに入れ、子どもの着物を作る羽布一丈を届ける。いい家ではモスリンを用意した。味噌漬け、車麩、かんぴょうなど産後の食べ物も届けた。

産後、実家から帰るオビアケには、嫁の実家で支度をしてカケウブギにイナギを赤子に着せて、仲人と親でまずウジガミにお参りし、ウブスナサマである山王様（日枝神社）と、コヤスサマにお参りに行く。七つの祝いのオビトキにも同じようにお参りをする。イナギは晒しでものさしを使わずに作る。衿に赤い布をつけ、背には麻の葉のように紅白の糸で縫う。

オビアケにはサンミマイをいただいた親戚や近所の人を呼んでマゴイワイをする。マゴブルマイといい、赤飯をたいて鯛の尾頭付きの折箱に引き物も用意した。当日、「今日はオビアケですから、何時にお願いします」と声をかけながら、おジュウバチに入れた赤飯を届ける。何十軒も配るので、蒸かす人配る人で手分けをした。いただいた方では、赤飯を少し残し、マッチ一つか石鹸一個を入れて返す。オビアケには、一円とか五〇銭のご祝儀とイリイワイというおひねり（最近は小さな駄斗袋）を用意していく。イリイワイは、子どものカケウブギの紐に挟む。

女の子は三月の節供、男の子は五月の節供の祝いに親元や親戚から贈られたこいのぼりや雛人形を飾る。男の時にはお金でいただくこともあるが、こいのぼりをいただくこともあった。また、女の子のときには潮汲みや藤娘の人形を贈られることもあり、それらはお雛様の段の前に飾る。三月は桜餅、五月は柏饅頭を作り、お祝をいただいた人にお返しをする。

ハツヤマは、一歳未満の六月一日に八代の浅間様に実家から贈られた着物を着せて行く。うちわとお札をいただい

てきて、ハツヤマイワイをいただいた家に配る。うちわは裏側に「祝」という文字と子どもの名前を入れたものを二本ずつ配る。七つはシメヤマ。丈夫に育つようにとお参りに行く。

子どもが生まれて初めての正月を迎える暮の祝いに、女の子には羽子板、男の子には破魔弓を送る。竜ヶ崎の観音様の近く（下町）の大新で製造販売している。祝いに掛け軸を持ってきてくれる人もいたが、最近はお金を包む人が多い。親戚からいただくサンミマイ、節供の祝い、ハツヤマイワイ、オビトキの祝いにはお返しをするが、お歳暮はモライキリという。

子どもが早く歩くと、唐草模様の風呂敷に包んだ一升餅を背負わせる。

ミツドキは数えで三つのときに行う、オビトキの簡単な行事。親元で着物を作ってもらい、餅を搗いて身内だけで酒盛りする。総領のオビトキは大変だった。前の晩から餅米を冷やし、夜中の一二時過ぎから夜通し餅搗きをし、当日配る。そして翌日は片付けと手伝いを頼み四日かかった。配る餅の数は付き合いによってそれぞれ異なるが、カゴモチといい、籠に葉を敷き、餅をいれる。赤い餅も入れてオビトキの案内をしながら配った。嫁の実家からは女の子なら着物男の子なら洋服のほかに、ベビーダンスや洋服ダンスや机が届く。タンスも空っぽというわけには行かないので普段学校に着て行くようなのを買って入れ、金持ちの家になると親のものまで入れてくる。最近は貸衣装を利用する人もいる。普段着のようなものを買ってくれる親もいれば、お金を用意する親もいる。

ウジガミサマや山王様にお参り（最近は車で行くので観音様や八坂神社にお参りする人もいる）する。祝いの席では、オビトキッコ（オビトキの子）がお盆を持って回るとお祝の他に用意したイリイワイをお盆にのせてあげる。最近は料理屋で行うようになったが同様に行う。

坪にオビトキの子がいないときには、紙の衣裳を千代紙でへらと糸と針で二組作り子安様に着せる。子安様のオビトキには昔は餅をついたが、今は宿になった家へ行って、お米を持ってお参りしてくる。以前はオピシャの宿でやっ

ていた。

サンミマイ、オビアケ、節供、ハツヤマ、お歳暮、オビトキなど、親戚や坪や組合（四軒から七軒くらいの単位）の付き合いの範囲で祝いのやり取りがあり、ミツメノボタモチにも、親戚が手伝いにきた。最近は、サンミマイに餅米を持ってきても伊勢屋さんなどのパックに入れた赤飯や餅で返してくるようになったという。

馴馬町平台は人口が増加した地域であったが、ニュータウンと以前からの坪を単位とした地域で区別され、同じ平台に住んでいても以前から馴馬に住んでいる人と新しい人では付き合いかたが全く違った。

土地の風習に縛られ、よそから嫁に来た人は大変だったという。親戚や近所の人を呼んだオビアケの祝いの席に立派なカケウブギを着せてくるかと思ったらネンネコバンテンで帰ってきたので、嫁が追い出されたこともあった。後に長男であるも家を出てシンタクになったが、実際にあった話である。

また、上下によって支度が違うので、いいところの長男の嫁になったら大変。最近は嫁も外で働くようになったので、親元が支度をしてくれないようなところでは、お金を貯め実家に頼んで支度をしてもらうところもあった。

しかし、結婚も以前のように同じような格式の家同士が条件ではなくなり、当事者同士の合意のもとに新しい家庭が築かれる。価値観も当然変化し、無駄なものにはお金をかけないという意識も高まってきた。オビトキに貸衣装を利用し、必要なものを購入するといった傾向がみられるようになってきた。そこには、従来の慣行にはとらわれない現実的な対応が見られる。

《大徳町上佐沼の場合》

胎盤は新聞紙で包んで一家の親父さんがお墓に埋めたという。産湯については、やたら捨てるものではないと聞いていたが、自分のときどのようにしたのかはわからなかったという。産後二〇日は、足の裏がくすぐったくて足がしびれて、立てなかった。お産のあとは風にあたるなともいわれていた。

ミツメノボタモチは、もち米で炊いたご飯を重箱につめ、その上に小豆の煮たのをのせたもので、産後三日目に作る。ミツメノボタモチを食べて初めてお乳が出るという。仲人にも「今日はミツメだから」と届ける。ミツメノボタモチは今でも盛んで、孫のときには病院に届けた。

出産後、友引か先勝の日に、両親や親戚が一升枡にいっぱいの餅米や現金、一丈布、かつぶし、卵などを持ってサンミマイに来る。坪内の人からもいただいた。半紙を横に折って紅白のこよりで綴じた産見舞帳にいただいたものを記入する。

生後二〇日目のオビアケにはサンミマイをいただいた人を招待するので、いただいたもち米で赤飯を蒸かしお重に入れて配りながら、「いついつにオビアケをしますからお願いします」と声をかけてくる。赤飯は一口分だけ残しお重は洗わないで返す。

オビアケの日には、親元で用意してもらったオボキを子どもにかけ、仲人に付き添ってもらいウジガミサマ、子安様、ウブスナサマの順にお参りに行く。結婚式のあと、近所の人を呼んで嫁のお披露目をすることをエヅキといいウジガミサマやウブスナサマにお参りするが、このときは近所の年かさの人が嫁を連れていく。「連れ出す」から仲人は付き添わないのだという。

祝いの席では、夫と共にお嫁さんが赤ちゃんを抱いて見せてまわる。そのときに、招かれた人はお祝いのほかにおひねりや小袋に入れたウチイワイを生まれた子にあげる。最近は料理屋を利用しているが、お祝いは先に渡してもウチイワイは両親が赤ちゃんを見せて回るときに渡すものであるという。しっかりしてからと二〇日ではなく、大分経ってからオビアケをすることもある。

ハツヤマは旧六月一日、八代の浅間様にその年に生まれた子を連れてお参りに行く。男親が子どもをおぶって自転車で行ったものである。ハツヤマイワイをいただいた家にうちわを二本一組で配る。ちなみにヤマジマイは六歳のと

きで、このときもお祝いをいただくがお返しはしない。

初めての正月を迎える子どもに、女の子には羽子板、男の子には破魔弓を贈る。暮のモノといい、これに対するお返しは翌年の節供に兼ねる。女の子には桜餅、男の子には柏餅を用意する。

誕生日前に歩くと、一升餅を背負わせる。米作地帯なのでご飯はたくさん食べられたが、産後はしょうがや大根の味噌漬けだけで食べていたので、お乳がよく出るわけがなく、誕生前に歩くことは少なかった。

長男のオビトキは盛大にやった。近所の人を頼み、三日くらいかけて餅を搗く。前の晩に餅米をひやし、夜中の一二時ごろから蒸かし、朝明けるまで搗いていた。餅は初め七人で搗き、次は五人、次は三人でというように、七五三と搗く。そのため杉の木で作ったオを一〇本ぐらい用意した。搗いた餅は小さく丸め、重箱に入れて届ける。親元には着物などたくさんお祝いを貰っているので、椎や樫の木の葉を敷いたカゴモチにして届ける。「いついつお祝いですから、来てください」と言うと、届けられた家ではお祝儀を出す。当日はお祝いの他にお祝いの子どもにウチイワイを用意していき、オビトキッコの着物を誉めながら渡す。

Tさんの長男のころから派手になり、男の子なら洋服と洋服ダンス、女の子なら着物とベビーダンスに子どもの布団一組、近年はそれに勉強机まで実家が用意するようになった。最近では料理屋に招くが、家でお茶を一杯飲んでもらってからマイクロバスで行くので、実家から届けられた品を飾り、披露することにかわりない。

オビアケやオビトキの祝いの場が自宅から料理屋へ移り、自宅で用意した赤飯や餅を専門店に依頼するようになったものの、祝いの内容はほとんど変わらずに今日まで伝えられている。TさんとMさんの嫁世代五人からの聞書きにおいても同様で、お祝い事などの近所の付き合いは、「着物を着てどこそこへ行くように」という親の指示で動いたという。Tさんたちの親の世代から伝わるお産をめぐる儀礼の内容は今も受け継がれているのであった。

龍ヶ崎市大徳町上佐沼の聞書き調査では、坪を単位とした地域ぐるみの儀礼や伝承が色濃く存在しており、二〇年

前の報告書の内容と比較しても多少の欠落や変化がみられる程度であった。お産の場が自宅から医療施設内へと移り、オビアケやオビトキの披露の場が自宅から料理屋へと移る一方で、お産をめぐる儀礼においては地域に拘束された慣習が色濃く残っている。近代化された医療施設でのお産を経験している世代の人々も、お産をめぐる儀礼に関しては地域社会の中で延々と受け継がれてきた伝統を現在も守ろうとする意識の高いことが明らかとなった。

四、お産をめぐる環境と儀礼

人は赤子の誕生をめぐって、出産という現実に対応するために環境を整え、より良い産育をという願いから儀礼を営む。通常出産には助産が必要なので、介助者は出産環境の主要素となる。三世代の聞き書きはそうした出産環境の変遷を見事に物語っている。

報告書に見られる近代化以前に生まれた第一世代の出産は、祖母や近所の助産に手馴れた、通称トリアゲバーサンやコトリバーサンという地域共同体の一員がその役割を担ってきた。大宮地区には大正末には資格を有する産婆が存在していた。しかし、多くの場合はトリアゲさんに頼んだようだ。「巡査が呼びかけた」というのは、新たに制度化されたものを拡張しようという新生活運動のような啓蒙的な取り組みがあったのかも知れない。

第二世代の出産事情にも第一世代と同様、トリアゲさんと産婆の混在が見られるが、産科医が登場してくる。ただ、その契機が「最初の子だからと親や姑に勧められた」という。戦後の科学技術に対する信頼が高まっている様子がうかがえる。そうした信頼を背景に出産が医療対象として認識されていく。戦後生まれの第三世代の五人は例外なく産院で出産している。出産の場が自宅から施設へと変わってくる。無資格者から有資格者へという介助者の変遷は、当然ながら施設分娩という方向に向かわせることになった。

こうした現象は近代化に伴う動きと連動していた。産婆資格や医師免許は地域共同体を超えた国家資格として制度化される。したがって出産の場や介助者を中心とする出産環境の移り変わりに際して、近代化の動きは大きな影響をもつものであった。しかし、地域度の高低による相違はほとんどなかったといってよい。

ところで、伝統的な地域共同体にあっては生活上の多くの場面はその中で、あるいは隣接する共同体、いわば拡大地域共同体といったものの中で、自己完結していたと考えられる。民俗事象に必要な物や人はそうした地域共同体において調達できた。

安産祈願にはじまってお七夜を経、年祝いへと展開する産育儀礼は、大規模なものでも地域共同体を超えるものではなかった。地域共同体の中で完結するものであった。したがって儀礼の継承という点からすれば、伝統的な地域共同体の拘束力の度合いが高いか低いかは大きな要因となり得る。人々の継承意識に関わるからである。それは個人の意識だけではなく、共同体の構成員としての意識でもある。

こうした点から二つの地区を対照すると、人口急増によって坪や組合などが形骸化した馴馬町平台の場合は、儀礼そのものに変化・変容が見られ、現在でも以前と同じように機能している大徳町の場合は変化の様相が小さいことが認識できる。つまり、お産をめぐる環境は近代化の波を大きく受けて医療の管理下となった。一方、儀礼は地域度によって、その継承に大きな相違が生じてきたことを示しているのである。

《参考文献》

龍ヶ崎市教育委員会編　一九八五『龍ヶ崎市史　民俗調査報告書Ⅰ――馴柴・八原地区――』龍ヶ崎市

龍ヶ崎市教育委員会編　一九八六『龍ヶ崎市史　民俗調査報告書Ⅱ――長戸・大宮地区――』龍ヶ崎市

龍ヶ崎市教育委員会編　一九八七『龍ヶ崎市史　民俗調査報告書Ⅲ――北門間・川原代地区――』龍ヶ崎市

龍ヶ崎市教育委員会編　一九八八『龍ヶ崎市史　民俗調査報告書Ⅳ――龍ヶ崎地区――』
龍ヶ崎市教育委員会編　二〇〇〇『龍ヶ崎市史　近現代史料編』龍ヶ崎市